

稲叢懷古（太宰春台）
いなむらかいこ　ださいしゅんだい

沙汀　南望すれば　煙波　浩たり
さてい　なんぼう　えんぱ　こう

聞説　三軍　此れより　過ぐと
きくならく　さんぐん　こ　す

潮水　歸来して　人事　改まり
ちようすい　きらい　じんじ　あらた

空山　迢遞　夕陽　多し
くうざん　ちようてい　せきよう　おほ

沙汀南望浩煙波　聞説三軍自此過
潮水歸來人事改　空山超遞夕陽多

解説　元弘三年、新田義貞が大軍を率いて鎌介の稲村が崎に至り、宝剣を海中に投じて潮を退かせた昔を追懷した作。

語釈　※沙汀Ⅱ砂の波うちぎわ。砂浜。※煙波Ⅱもやのこもった波。
※聞説Ⅱ聞くところによれば。※三軍Ⅱ大軍。※空山Ⅱ人のいないさびしい山。※迢遞Ⅱはるかに遠いさま。

通釈　稲村が崎の砂浜からはるかに南の方を見やれば、広びろとした波の上にもやが立ちこめている。かの名将新田義貞はここから干潟を渡り、大軍を率いて鎌倉に攻め入り、北条高時を滅ぼしたと、かねてから耳にしている。いったん退いたこの海水が、またもとに帰り、波は浜辺にうち寄せているが、人の世のことは、昔と変わってしまっており、ただ人氣のないものさびしい山がいつぱいに照らす夕日を受けて、遠く連なっているばかりである。